慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	徳川時代の社會經濟思想概論(日本評論社發行, 野村兼太郎著)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.1 (1935. 4) ,p.178- 179
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0178

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社會改革を實行せんとするものであることを論じて居られる（第四章、貨幣經濟批判）。「政談」に於て徂徠が最も强調する武家土着論は、彼れの社會改革論の中心である。卽ち著者は武家土着論を主として、徂徠の社會改革論を批判せられた。「彼（徂徠）は貨幣經濟の弊害を知り、殊にそれが武士を中心とする封建社會を毒するものであることを悟つて、これが救濟策として自然經濟に歸らんとする者である」となしまた「徂徠は、商人の有する經濟的權力を――當時の言葉を以てすれば財用の權を――純粹の封建制度を樹立することに依つて奪回せんとしたのである」となし更に「要するに商人を除く、あらゆる階級にとつて地方生活が必要であり、又それに依つて現存する諸弊害を救ひ得ると考へたのである」と述べて徂徠の武家土着論を說明せられ、次に戸籍・路引その他について述べ、以て徂徠の庶民統制法を明らかにせられ「幕府をして極力强力化して武家中心の社會を實現せんとしたこと」に於て、「斯くまでも大膽に、又かくまで組織立てて、武家階級救濟の改革案を提言したものは、以前には全く發見されない」と結んで居られる。（第五章、社會制度改革論）。最後に德川時代の社會經濟思想史上に於ける徂徠の位置について、「封建的經濟理論の最高峰」たることを强調せられ、而して彼れの思想が後世如何に發展せるかを辿つて居られる。（第六章、結論）。要するに本書は社會科學建設者としての荻生徂徠を論述したもので、彼れの經濟論と社會改革論を最も深く研究され、而して最も的確なる批判を下して餘蘊なきものといふべきである。封建思想に多少とも興味を有するものとして筆者は心から野村教授に敬意を表する。（社會科學の建設者、人と學說叢書、定價一圓二十錢）（有賀春雄）

德川時代の社會經濟思想概論（日本評論社發行　野村兼太郎著）

從來德川時代の社會經濟思想を論じたものは少なくないが、これを歷史的に取扱つたものは殆ど無いといつてよいであらう。本庄博士や瀧本博士や中村博士は何れも德川時代の經濟思想研究に於てそれ〴〵特色ある著述を公にされてはゐるが、未だ思想的體系を備へたものは遺憾ながら發表されてゐないのである。野村教授の「德川時代の社會經濟思想概論」は敢へて思想史と銘うつたものではないが、內容は立派に體系づけられた思想史である。一體、德川時代を一口に封建制度と概稱し、これを綜觀的に取り扱ふ方法は、勿論意義が無いとは言はれないが、然し二百數十年間の變遷を無視するのは贊成いたし難いところである。思想に限らず政治でも制度でも所謂德川三百年間に於ける變化の跡を觀なければそのものゝ意味が完全に理解できるものではない。筆者は久しく德川時代に於ける社會經濟思想の發展的研究の公けにされるのを期待してゐたが、今や野村教授の著書を手にすることを得て、久しい渴望は完全に醫せられた心地がする。

本書に於ては德川時代が四つの時期に區畫せられてゐる。卽ち元祿以前を幕府草創期とし、元祿・享保時代を幕府成熟期となし、更に寶曆・明和より寬政に至る時代を幕府頽廢期とし、最後に化政・天保時代を幕府衰亡期とし、以て時代の變遷と思想の發展とを辿つて居られる。然かも時代の背景を明確に描寫し、思想の時代的特色を確然と指摘し、時代と思想との交響に明快なる說明を

加へられたる手腕は全く敬服の外ない。著者は序文に於て「片言隻語からその論者の思想に近代的解釋を加へる方法等には贊成しかねる者である」と述べて居られるが、如何にも妥當な見解である。また同じく序文に於て、故瀧本博士が絶大なる努力を拂つて編纂された「日本經濟叢書」並に「日本經濟大典」に負ふて居られることを感謝せられ、故博士の編纂に對し不朽の功績といふ正當な讃辭を捧げて居られるが、著者の人格が偲ばれて尊い。瀧本博士の努力の結晶を利用して研究の便を得た學者は少くないが、博士の勞に正當なる感謝を捧げた人を未だ知らない。同博士は多少獨斷的なところはあつたが、とにかく日本經濟思想の研究に於ては實に陳勝吳廣の功を擔ふべき人である。今や博士の他界せられた後、野村教授がその大成に向つて努力を傾注して居られることは欣快に堪へぬ。著者が豫約された次の大著の一時も早く學界に送られん日を鶴望する次第である。（新經濟全集三一、豫約定價八十錢）（有賀春雄）

支那社會經濟史（森谷克己著　章華社發行）

本書は京城帝大助教授森谷克己氏の近著で、社會科學的に支那經濟史を研究記述したものであり、その課題は同氏によれば「原始的種族社會の分解と共に形成された『中華』支那人の社會をば、遡つて到達し得られる始原代から最近世界資本主義體制に絡み込まれるに至るまで、その現實的生活過程に就いて考察し、その經濟的構築の累進的繼起、諸形態の特質、および現實の運動の諸事情を闡明すること」であり、支那の時代區分を、第一篇原始時代（石器時代より殷代まで）、第二篇『未熟なる』封建社會の成立時代（周及春秋戰國）、第三篇官僚主義的封建制の成立時代（秦漢）、第四篇均田制の成立時代（魏晉南北朝）、第五篇官僚主義的封建制の發展時代（隋唐元明）、第六篇官僚主義的封建制の完成とその崩壞時代（淸以後）とし、各篇を更に細分して、各種の問題と事實とを網羅概述されたものである。本書は各國社會經濟史叢書の一篇である爲め、頁數、發行時日その他に就いて種々の制約を受けたのであるが、それにも拘はらず、從來此の方面に纏つた好著の少い折から、その缺を滿たすものとして、大方の歡迎を受けるであらう。

本書を一讀して感ずる事は、比較的古代に精にして中世近世に簡なることである。古代に於ける乏しい資料を成可く生かさうとされる努力は多とするが、一方に於て殷末以來を以て大體信憑すべき時代とされながら、他方に於て忽ち伏犧神農等の神話をひいて、支那人もかゝる時代を經過したことがあるとされたり、禹貢の記事を採用されたりするのは妥當とは思はれない。尙氏は田制稅法の問題に就いて次の如き見解を持してゐられる。これは氏の古代の部に於ける新說であるから左に一寸紹介して置かう。氏によれば、古代支那社會の經濟的構成の歷史は大體井田・助法から初まるのであり、井田・助法自體は、より始原的な農業共同體が、周の『未熟なる封建制度』のもとに、これが基礎として再組織され、一面農奴的關係を附加されると同時に、他面本來の姿容を多分に保存しつゝ直接、謂はゆる井田・助法に轉化されたのであり、勞働生產力の極度の未發達により、最初の農業的剩餘生產の存在